

‘Sely Dido’ : *Legend of Dido* における Dido 像

金井典子

Abstract

In *Legend of Dido*, Chaucer retells the well-known story of Aeneas and Dido. He mentions the classical authorities, Virgil and Ovid, to follow in telling the tragic love. In *Legend of Dido*, however, the narrator takes the position of pro-Dido; Dido as a faithful lover and Aeneas as a traitor. This paper explores the idea of ‘a good woman’ in *Legend*. Treatments of Dido in Virgil, *the Aeneid*, Ovid, *Heroides* and Chaucer’s earlier poetry, *House of Fame* are discussed, so that I could point out the uniqueness of Dido in *Legend*. Dido’s gift-giving and hunting scenes particularly show the reverse role of male and female, then this leads one possible answer of ‘a good woman’ portrayed in *Legend*, that is, a law of Nature.

キーワード : 『善女列伝』 ディード チョーサー 古典受容

はじめに

Legend of Good Women 『善女列伝』は、チョーサーの絶世期の作品であるが、失敗作だとする批評もある。失敗作とされる理由には未完であることが指摘される。序文(Prologue)において、作者は God of Love と Alceste の名を受けて、物語を語る設定となっているが、これをチョーサー自身の立場と合わせ、彼が宮廷の命により創作活動することに嫌気がさしていたのではないか、ゆえに未完のまま投げ出してしまったと評価を受けてきたがⁱ、その後、Frank は、序文の書き直し(F版とG版)を理由に作家は本作を投げ出したのではない。また、後に Man of Law’s Tale においても本作の言及があることから作家にとっての本作の価値を指摘する(189-210)。Kiser は本作のテーマの統一性を肯定し、序文の Alceste を通して、キリスト教と古典の融合が図られていると指摘する(26-27)。近年の研究では、歴史的に解釈する Pattersonⁱⁱ が挙げられる。近年の作品解釈の傾向は、Phillips が言うように、Chaucer にとっての ‘a work whose composition and themes continued to occupy him as he worked on his *Tales*...’ (298) であり、‘Rather than being abandoned because it was too boring, the *Legend* may

have proved too complex and paradoxical, too full of tensions’ (298) と捉えられる。筆者もこの点に同意するものであり、本作の解釈の一可能性の提示として、本稿の議論を進めていく。

本稿は対象を『善女列伝』中の *Legend of Dido* に絞り、Dido を通して導き出される ‘Good Woman’ を論じることとする。特に、チョーサーにとっての古典であるウェルギリウスによる *Aeneid*, 『アエネーイス』、オヴィディウスによる *Heroides*, 『名婦の書簡』にみる Dido 像、またチョーサーの初期の作である *House of Fame*, 『名声の館』にみる Dido 像と比較しながら、*Legend of Dido* の特異的な点を明らかにし、Good Woman の解釈を試みる。

1. 語りが作り出す Dido 像

序章において作者が受けた命は、善良な少女、淑女、婦人の愛、彼女たちの生涯一筋の愛について (G 473-475)、また彼女たちを裏切った不実な男たちについて、彼らがどれほどの傷を与えたのか (G 476-478) を語ることである。*Legend of Dido* に登場する Dido は以下のように語られる。

This noble toun of Cartage hath bigonne;
In which she regneth in so gret honour
That she was holden of alle queenes flour
Of gentillesse, of fredom, of beaute, (1007-1010)

Dido は統治者たる女王であること、あわせて内的な美德、外的な美も備えている完璧な女性として語られている。ウェルギリウスの Dido 像は、ウェルギリウス以前の、Timaeus や Justin といった歴史書物の影響を踏襲しており、カルタゴの英雄的統治者としての色合いが強い。オヴィディウス『名婦の書簡』では、Dido は嘆き悲しむ一女性の姿となり、統治者としての威厳、強さをみることはできない。この古典の大家両方の語りを借りながら、チョーサーは『名声の館』第一巻において Dido と Aeneas の物語を再現するが、上記引用部が示すような Dido 像は提示せず、Dido はカルタゴの女王であり、Aeneas に恋をしたと簡略にまとめているだけであるⁱⁱⁱ。*Legend of Dido* も、『名声の館』と同様にウェルギリウス、オヴィディウスに従い Aeneas と Dido について語ると宣言し (924-929) 始まる。*Legend of Dido* の語りは、作品の目的である女性の真実の愛を語ることにふさわしく Dido を作り上げていると考えることができる。

Legend of Dido の Dido はさらに力強く描写される。

This fresshe lady, of the cite queene,
Stod in the temple in hire estat real,
So rychely and ek so fayr withal,
So yong, so lusty, with hire eyen glade,
That, if that God, that hevене and erthe made,
Wolde ham a love, for beaute and goodnesse,
And womanhod, and trouthe, and semelynesse,
Whom shoulde he loven but this lady swete? (1035-1042)

目にも眩しい姿で君臨する Dido の姿が描き出され、神が恋人を選ぶとしたら Dido 以外にないだろうと述べる語りにより、Dido は神格化されたイメージに近く築きあげられている。

一方、Dido の目に Aeneas は理想の騎士のように映る：‘he was lyk a knight, / And suffisaunt of persone and of myght, / And lyk to been a verray gentil man; / ... / And hadde a noble visage for the nones, / And formed wel of braunes and of bones.’ (1066-08, 1070-71) これらは Dido の視線から語れるが、Desmond は Dido の Aeneas の筋肉 (braunes) と骨 (bones) へのフェティシズム的な着眼は、対象の欠点を見ないための機能であり、Dido は彼女の理想で作りに上げた Aeneas を見ているのだと指摘する (157)。読者はここに語りによって築き上げられた神々しい Dido とその Dido によって理想化された Aeneas の姿を見るのである。

語りが作り出す Dido 像は彼女の内面的な美德も強調していく。Aeneas の話に思いを寄せる Dido の心情は以下のように語られる。

Anon hire herte hath pite of his wo,
And with that pite love com in also;
And thus, for pite and for gentillesse,
Refreshed moste he been of his distresse. (1078-1081)

Aeneas の悲しみに同情の思いを寄せる Dido であるが、Aeneas はカルタゴの地までトロイの崩壊が伝わっていることを知り、泣き叫んだと語られている (1032-1034)。ウェ

ルギリウスの同じ場面においても、確かに Aeneas は壁に描かれたトロイの崩壊の図を見て、泣き崩れる。*Legend of Dido* の Aeneas は、‘Throughout the world oure shame is kid so wyde, / Now it is peynted upon everysyde.’ (1028-29) と言い、恥が流布していることに泣く。ウェルギリウスの Aeneas は、トロイの英雄たちの戦いの様をひとつひとつなぞりながら、泣いている。涙の意味の違いは *Legend of Dido* の Aeneas に「より弱い人物」という印象を与えるのではないだろうか。*Legend of Dido* の Dido の特徴である ‘pite’ と ‘gentillesse’ は、その相手がウェルギリウスから離れた弱気な Aeneas であるからこそ、より強められ、Dido の盲目的な恋と悲劇の要素が高まる。

2. Gentil Dido

‘pite’ と ‘gentillesse’ に表される *Legend of Dido* の Dido は Aeneas に溺れていく。Dido の寛容さは、その贈物にもみることができる。Aeneas をもてなすホストとして、彼女が贈ったもの、馬、宝石の数々、鷹、猟犬、金貨は、11 行にわたり詳細に記され、全てが最高級のものだとされる。

There nas courser wel ybrydeled non,
Ne stede, for the justing wel to gon,
Ne large palfrey, esy ofr the nones,
Ne jewel, fretted ful of ryche stones,
Ne sakkis ful of gold, of large wyghte,
Ne ruby non, that shynede by nyghte,
Ne gentil hawtein faucoun heroner,
Ne hound for hert or wilde bor or der,
Ne coupe of gold, with floreyne newe ybete,
That in the land of Libie may be gete,
That Dido ne hath it Eneas ysent. (1114-1124)

Dido のもてなしは ‘Thus can this queen honorable hire gestis calle, / As she that can in fredom passen alle.’ (1126-27) と結ばれ、誰おも凌ぐ寛大さであると評される。Aeneas を迎える宴から続く Dido のもてなしの描写により、彼女の気前の良さと懐の深さが強調される。

一方、Aeneas も Dido へ贈り物をするが、その描写は一種の滑稽さをも醸し出すもの

である。

Bothe sceptre, clothes, broches, and ek rynges,
Some for to were, and some for to presente
To hire that alle thise noble thynges hym sente; (1131-33)

Aeneas の贈物は品名のみ 1 行に集約される。“Ne ...” の形容を付された Dido の唯一無二の贈物との比較において、“Some for to were, some for to presente” (1132) としか形容されていないこれらの品物に Aeneas の心は感じられず、儀礼的な返礼程度の印象を残す。しかし、Dido は、‘And of the presente ... / She thanked hym ful ofte, in good entente.’ (1148-49 傍線筆者) とこの贈物に感謝するのだが、‘in good entente’ と付すことにより、彼女の寛容さを際立たせることになる。同時に、寛大な Dido が際立つほどに、Aeneas の軽薄さを表すことにもなる。

Frank は Dido のもてなし、また贈物についての Aeneas との不均衡さ、Dido が ‘giver’ であり Aeneas が ‘taker’ である関係のうちに、既に女王としてのもてなしというよりも、彼女の感情的な思いがあることを示唆し、‘her heedless giving of self’ (68) であると指摘する。実際、贈物への非常な感謝を見ても Dido が Aeneas へ心を取られていることは明らかである。

この *Legend of Dido* にみる贈物の交換はウェルギリウスのテキストでは逆の形で記されている。先に贈物をしたのは Aeneas であり、彼のギフトは詳細に述べられる。*Aeneid*, Book I から引用する。

Munera praeterea Iliacis erepta ruinis
ferre jubet, pallam signis auroque rigentem
et circumtextum croceo velamen acantho,
oranatus Argivae Helenae, ...
..... colloque monile
bacatum, et duplicem gemmis auroque coronam. (I, 647-50, 654-55)

さらに、この品の中のひとつはレダの娘ヘレネにまつわるものであるとも紹介されている。Venus を母に持つ Aeneas の出自、崇高な運命を担う英雄にふさわしい格のある贈物であるように列挙されている。

Legend of Dido における Dido の贈物の詳細な描写は、ウェルギリウスにおける Aeneas からの贈物の描写を準えたものである。両者の構図は同じで、地位ある者からゲストへの最高級品の進呈であるのだが、その性が逆転している。これは単にパロディーと捉えるべきではないだろう。女性が男性に先んじて giver になることは中世社会においては異例のことである。Hume は、中世社会では女子には男性に贈り物をしないことよりも、受け取らないことが望まれていたと指摘する (186)。また、男性から贈り物を受け、返礼をする際であっても、‘they [women] would not normally have initiated an exchange of gifts’ (186) と女性が主導権を握ることはないとしている。この社会通念と合わせると *Legend of Dido* におけるこの性の逆転は Dido の徳の破壊でもあるといえる。Dido は Aeneas へ贈った品物と同様に、他に類を見ない美と徳、地位と権力を備えた女性であるように築き上げられてきたが、ここで女性のたしなみとみなされる行為から逸脱する。Dido は、女性としても女王としても不釣り合いな行為をしているのである。彼女の美德 ‘gentillesse’ に疑問符が付く。

3. Sely Dido

Aeneas の行為が Dido への裏切りなのか否かは、結婚の約束を交わしたか否かによる。Aeneas と Dido が二人で洞窟に入り、誓いを立てる場面が *Aeneid* IV である。ウェルギリウスでは、Aeneas はこれを婚姻の約束とは取らないが、Dido は婚姻の成立と理解している。『名声の館』では、この洞窟のシーンは語られることはない。*Legend of Dido* では、語り手は躊躇なく語る。Aeneas と共に狩りに出た Dido は嵐に合い、ふたりは洞窟に身を隠す。

And here began the depe affeccoun
Betwixe hem two; this was the firste morwe
Of hire gladnesse, and gynning of hire sorwe.
For there has Eneas ykneled so,
And told hire al his herte and al his wo,
And swore so depe to hire to be trewe
For wel or wo and chuang hire for no newe;
And as a fals loveire so wel can pleyne,
That sely Dido rewede on his peyne
And tok hym for husbonde and becom his wyf

Fore evermo, whil that hem laste lyf. (1229-1239)

ここでも Dido は Aeneas の悲しみに同情している (rewede) ことが述べられる。しかし、ここで語りは Aeneas を作為的な人物と評する。‘as a false lovere so wel clan pleyne’ という注釈的な語りにより、この場面の Aeneas の行為は全てが計算であり、Dido は騙されていることが明らかになる。

このシーンに先立ち、Dido の Aeneas を求める願望が繰り返されている。‘That sely Dido hath now swich desyr / With Eneas, hire newe gest, to dele, / That she hath lost hire hewe and ek hire hele.’ (1157-1159) Dido は Aeneas と結ばれたいと強く願うあまり健康を害したとされる。つまり恋煩いの状態である。妹 Anne には結婚の意思を伝えてもいる (1179)。1158 行目で使われる ‘dele’ は身体関係を結ぶことを意味する。制度的な結婚を求めるよりも Dido は Aeneas 自身を欲していることがわかる。女王が結婚することがもたらす影響には言及しない *Legend of Dido* では、彼女の欲求は「公」の立場を離れ、「私」的な立場にある Dido を示しているのだろう。

Dido が狩りに出る姿も同様に象徴的である。彼女は、金の刺繍がほどこされた赤い鞍のついた白い馬に乗っている。その様子は、‘This amorous queene’ (1189)、‘this lusty freshe queene’ (1191)、‘So priketh hire this newe joly wo’ (1192) と語られ、前半部の神々しい描写に対して、ここではかなり情欲的な女性像が浮かび上がる。この Dido を Frank は ‘[she] is the beautiful object, that last and richest gift of all that she has to give.’ (69) と捉える。上述の引用箇所は誓いを交わす様式的な姿が浮かび上がるが、洞窟での誓いがそれ以上のことを意味しているのかは語らずとも十分に理解できるのである。

Legend of Dido では、ウェルギリウス、オヴィディウスと異なり、Dido の妊娠は明らか事実となっている。ウェルギリウスでは妊娠についての言及はなく、オヴィディウスではその可能性が示唆されるだけである。妊娠が仮定ではなく事実であると Aeneas の裏切りはより重いこととなる。だが、同時に Dido についても、Aeneas への不用意で、早急で、過度な傾倒によって、それまで構築された彼女の徳、イメージを崩していることも彼女自身の罪と言えるのではないだろうか。

Dido の登場場面から、語りが構築してきた Dido の ‘gentil’、‘good’ という形容は語りの後半では、‘sely’ にとって代わっている。‘Gentil’ の形容を受けなくなった Dido は「公」の顔をなくし、‘sely’ な「私」の顔だけで語れる。

McSheffrey によると当時の社会規範は以下の通りである：‘Gender norms dictated

that men usually took the first and subsequent steps and that women reacted rather than acted; women could accept or refuse. ... those who broke them ran the risk of accusations of inappropriate behaviour.’ (21) Aeneas に過剰な贈物をして社会の規範を逸脱する異例なサインを見せた Dido が、‘sely’ と称されたのは恋煩いの場面である。上述のように、その際、Dido は Aeneas の身体を欲する。狩りの場面では、自身は Aeneas への Gift としての象徴的な姿があったが内実は Dido も自身の望みを手に入れたとも言える。

Dido に限らず、『善女列伝』に挙げられる悲劇的運命を受けた女性たちは、性の役割を逆転した行動をとっている^{iv}。性の役割が社会が作り出したものであるならば、それを逆転する衝動や行為とは人間に備わった Nature に関するものであろう。中世的に言えば、Goddess Nature の司る自然の法則に帰結する行為であろう。『善女列伝』の目的である ‘In makynge of a glorious legend / Of goode women, maydenes and wyves, / That were trewe in lovyng al here lyves;’ (G 473-475) の応えのひとつは Nature の容認であると Dido 像が語っている。

終わりに

「私」の顔の Dido が自身の欲求に正直であり、男性の役割を生き、そのパターンを『善女列伝』が ‘Good Women’ とするのならば、性的にアクティブで奔放な女性を『カンタベリー物語』は多く描いている。俗に悪妻と呼ばれる『カンタベリー物語』の女性についても、『善女列伝』の主人公たちと重ねていくことにより、新たな定義を見つけることができるのかもしれない。今後の課題としていく。

引用文献

- Chaucer, Geoffrey. *Riverside Chaucer*. Ed. L. D. Benson. 3rd edn. Oxford: 1987.
- Desmond, Marilyn. *Reading Dido: Gender, Textuality, and the Medieval Aeneid*. London: University of Minnesota Press, 1994.
- Frank, R. Worth Jr. *Chaucer and the Legend of Good Women*. Cambridge: Harvard UP, 1974.
- Hume, Cathy. *Chaucer and the Cultures of Love and Marriage*. Cambridge: D.S. Brewer, 2012.
- Kiser, Lisa J. *Telling Classical Tales: Chaucer and the Legend of Good Women*. New York: Cornell UP, 1983.

Overbeck, Pat Trefzger. 'Chaucer's Good Woman'. *Chaucer Review* 2 (Fall, 1967), pp.75-94.

Phillips, Helen and Nich Havely ed. *Chaucer's Dream Poetry*. London: Longman, 1997.

Vergil. *Vergil's Aeneid: Books I-VI*. Ed. Alexander G. McKay. Illinois: Bolchazy-Carducci, 1998.

- i Riverside 版、Explanatory Notes (1059-60) を参照。
- ii *Chaucer and the Subject of History* (1991).
- iii *House of Fame*, Book I, 241-223.
- iv Overback を参照。